
困った時の力ミ頼み

三河あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

困った時の力ミニ頼み

【著者名】

N1508E

【作者名】

三河あおい

【あらすじ】

元ヤンの秀仁はあおいと付き合つたために、今日も『髪の神』と共にあらゆる努力をするのだ！普通ではないラブコメ（？）が始まつた。

第1話 オープニング

人間といつもののは、必ずといつてもいいほど一つの事に夢中、熱中をしている。それがスポーツとか読書とか音楽とか、勉強とか（少なくとも、俺の周りにはそんな人種は存在しない）。だがしかし。俺は違う。俺が今熱中しているもの。

それは・・・恋だ！またの名を恋愛だ！話を言う前に一つ言つておこう。こんな話しさをしているが、僕は元々、いわゆる『不良』ヤンキーという人種だ。それを分かつた上で聞いてほしい。

始まりは、とてもありふれたものだ。いや、こんな奴にとつては全裸で富士山を下山できただけの奇跡だった。

アレは、この高校の入試のときだった。

テスト中に俺は、シャーペンを落としてしまった。当然ながら、拾おうとしてもその行動がカシンニングと見られてしまうのだ。予備のシャーペンも出しだが、そのペンには芯が入っていなかつた。得意科目の国語が出来なければ、俺は当然、この高校に合格などできない（できてもギリギリなんだが・・・）。まあとにかく、俺が途方にくれたときだった。

（ね、これ使う？）

隣から小さく聞こえてきた。ちょうど先生も居ないときだったから、僕は隣に首を向けた。その時、僕は思わず固まつた。声をかけた主は、背中を軽く覆う程の髪、整つた顔立ち、モデルのような外見の綺麗な女子だった。俺はしばらく動けなかつた。

（早く。先生が戻つてくるから。）

あえてもう一度言おう。当時の俺は不良だ。ヤンキー髪だつて赤に近い茶

色だったし、全員の制服が夏服の中、俺一人が、冬用の学生服を着ている。そんな人間にこんなに綺麗で、優しい人が話しかけてきた。もはや、奇跡という言葉では軽い気がする。とにかく、俺は彼女から受け取ったシャーペンで、この高校に合格することが出来た（もちろんギリギリ）。

そして、俺は無事入学して、5月^{ごよ}に気付いた。僕は彼女に恋をしていることを。

そして現在。

髪も黒に戻して、不良を引退することを決意した。全ては、彼女のために。俺は、それらの決意がウソじゃないことを誓いに、神社に来ていた。俺は賽銭箱に五円玉を一枚入れた。

「これぼつちしかないけど、俺は不良から足を洗います。そして、

彼女・・・椎名あおいと・・・」・・・交際させてください。」

・・・思わず声に出してしまった。まあ、決意表明ということでいいだろ?。

「・・・さて、行くか」

桜が並ぶ神社に背を向け、僕は彼女に会いに学校へ行つた。

第1話 オープニング（後書き）

無謀にも同時連載を始めます。

読者のみんな、作者に元気を分けてください。

できるだけ早く更新するよ! します。

第2話 悲劇は突然おこるもんだ（前書き）

こんな感じの小説なのでよろしくお願ひします。

第2話 悲劇は突然おこるもんだ

IJの門をくぐって早一ヶ月。落ち着いて考えたら、彼女とまともに話をしたのはほとんどない。というより、ペンを借りて、返してもらつただけ。少なくとも、彼女から見たらそれだけの仲だらう。

「はあ・・・どーすつかな・・・」

そんな事を考えてブルーな気持ちになつてゐるときだつた。

「よお秀仁君。朝から誰か死んだみたいな顔してさ。」

「バカ言つなよ。」

そんな俺に気軽に話しかけてくるのは、中学からの知り合いの川瀬修哉だ。その前に自己紹介が遅れた。俺の名前は稻葉秀仁だ。何度も言うが、『元』不良だ。一応言つておくけど、川瀬は別に俺と同じではない。むしろ、僕と一緒にいるのがおかしいほどの眞面目で、普通の人だ。

「しかしアレだよね。秀仁君はあおいさんと同じクラスなのにまだ一言も話してないって・・・」

「だつてしまふがないだる。あおいさんがそこいるだけで、俺は息を止めてしまうんだぜ。コレを緊張といわないでなんて言ひ?」

「じゃ、バカってことでいいでしょ?」

「誰がバカだつて、おい?」

俺が川瀬のブレザーの胸ぐらを掴んだときだつた。

「おはよう。朝から元気だね。」

「お・・・おはよう・・・」

あおいさんが、一点の曇りのない笑顔を向けながら校舎へと入つていつた。

「・・・やつぱり、お前から見ても、あおいちゃんって綺麗だよな

？」

「それはそうでしょ。その辺の秀仁君の見る目はず」こと黙つたよ。

」

『全く。無謀という言葉を知らんのか？アホめ』

「最後のアホってなんだ！お前の事やつぱいにヤツだと思つた俺

がバカだつたぜ！』

「誰もアホって言つてないよ…とりあえず、ボク教室に行くから

「待て口々、逃げ…・・・」

川瀬を追おうとした瞬間だった。

『まあ、止まれヒテトとやら。』

俺は思わず止まつてしまつた。その声は、明らかに高校生のではなく、表現をするなら『仙人』つてイメージの、老けたような声だつた。その声がどこから聞こえるのかが分からぬ。

「・・・誰だ。姿隠してないで出て来いよ。』

『落ち着け。今教えるから。』

その瞬間。俺の髪の毛が急激に引っ張られた。

「痛てててて…！誰だよ…・・・って誰もいないじゃん…・・・」

『自己紹介をしよう。私はカミだ。』

「・・・まさか俺の髪の毛のことじやないよな？

『少し違つた。私は、お前の髪の毛にいる『神様』だ、とこうこうとだ。』

『・・・・・・は？』

今どんな状況なんだ？誰か説明してほしい。

第3話 腐れ縁の予感

その日、俺は学校を休んだ。本当の意味で『正氣を失う』所だからだ。俺は自分の部屋にこもつて、『カミ』と会話をしていた。
「…………で？ なんなんだお前は。分かりやすく説明してほしいんだが」

『そうだな。ここにいるのは私とお前の2人だ。細かく説明しよう。何を聞きたい？』

「ありすぎて困るんだよ。……なんでソコにいるんだ？」

『それはだな。お前は朝、賽銭箱に五円をいれてこう願つたの？ 『足を洗いたい』と『交際をしたい』と』

正直、俺はものすごい動搖した。俺は周りに人がいないかを15回も調べた。けど、誰もいなかつた。

「な・・・なぜ・・・それを・・・」

『私はその時、お前の願いを叶えてやろうと、お前のそばに付いてさまざまな運を呼ぼうとした。……だがしかし…』

「だがしかし？」

『・・・ミスって憑いてしまった・・・しかも、髪の毛に・・・な』

「なんじやそつやーふざけんなー！」

その上、このカミはどこか自信満々にしゃべるから余計にむかつく。

「いや、待てよ。とこつてもあんたは神なんだろ？ 早く髪から離れるよ」

『私だって出来るならとつぶやくしてるわ』

『ものす』に嫌な予感がした。俺はおぞるおぞる聞いた。

「・・・・つてことは？」

『・・・離れないんだ・・・どういうわけか』

『なんじやそりや……マジふざけんな！』

今の俺は、すでに驚きより怒りの方が勝っていた。

『今すぐ髪切つてやる！』

『ムダだ。全ての髪の毛が私なんだ。切った所でどうこもならん。

』
「くつそう、それなら髪を抜いてやる！」

俺は力強く髪を握り締めた。

『断つておくが、今私の命とお前の命が、髪の毛で繋がつていろらしいから、間違つたらお互い死ぬぞ』

一瞬にして手の力が抜けた。俺はがっくり膝をついた。ようするに、離れる方法がないわけなのか・・・

『まあ、心配するな。少なからず『私』という神が憑いているんだ。お前の願いを叶えてやるう。文字通りの『一人三脚』でな。』

「・・・くそつまらんギャグだな・・・・・

願つた覚えのない不幸が現れたもんだ・・・・・

こうして俺はこのカミと一緒に奇妙な高校生活が始まった。

第4話 口は災いの元

現在、 昼飯時間。

「遅かつたね、秀仁君。今日は休むかとおも・・・どうしたの？」

「顔色悪いけど、今飯食へた？」

ハツチリに洪までんた

朝ご飯を食べなかつたからでも、体調が悪いから

うきない おにいに かくはなし

立川市立圖書館

「アラビア語」

「？ 朝からアラウマつて大変そうだね。」

もし、実際に自分の神・・いや自分の髪に神がのり移つたら、間違いなく大変じやすまないだろう。ある意味、地獄としかいえない。

『おじさん』

「外では話しあげるな。声が聞こえたらどうするんだよ。」

「おはようございます。」

ギュウウウウツツ

「ぐああ――！頭が――！」

「ひ、秀仁君！大丈夫！？」

クツ・・・調子に乗りやがつて・・この神があ——

・・・あんまり子】のんなよ・・・」

秀仁君、ホグは別に何も

「あら戯謔なう」バツ脱

「ちよ、ちよつと秀仁君、じうこ……」

「オラア、喰らえやあ——！」

俺は勢いよく髪を掴むと、ありつたけの力で髪の毛を抜いた（だいたい10本前後）。

『だから最初に言つただけ。私とお前は繫がつてゐるのだと。今のも、多少の寿命は減つたぞ。』

生きてるし。しかも、そう言えばそつだつた。しかし、それ以上に恐ろしい事態が起つた。

「・・・秀仁君。さつきからどうしたの？誰かと話してゐる風に見えるけど・・・」

とすると、あれか。俺がさつきからやつてたのは、周りからみれば、ただのひとりごとなのか・・・その上、教室中が静まり返り、皆がこつちを見ていた。この状況をどうやって回避しよう・・・

「・・・ほら・・アレだよ・・アレ・・・知つてるだろ？」

「、言葉が出てこない・・・俺は言い訳に使えるものを探すために、辺りを見渡しながらしゃべつた。

「アレって・・何？」

「ほら・・・アレって言つたら・・アレだろ？」

「だから、アレって何？しかもなんでキヨロキヨロしてゐるの？」

「いや、だから・・・アレだつて・・・・」

俺は、偶然運動場を見た。すると、この状況を逆転する奇跡が訪れた。

「そうだ！果たし状がきたんだよー。」

「はつ？誰から？」

「アレだよ、アレ」

俺は運動場にいるある男を指差して言つた。もちろんその男が知り合いだから、尚、事も運びやすいだろ。クラス中が驚いた。

「アレで・・・1ヶ^{ケリ}上の霧沢春一さんだろ？そんな人とケンカする気かよ。」

「ああ。久々にあつたと思つたら、決着をつけよづせ、なんて言わいたら氣合はいるだろ？」

もちろん、ウソだ。後は適当にこまかすか。

「それで？いつ闘るの？」

それは、俺の知らない男の発言だった。俺はこの後、今の会話を作ったのを後悔した。

「・・・聞いてどうするんだよ？」

「観に行くに決まってるだろう。の人と対等にケンカできる奴つて滅多にいないからなさ。皆も観てみたいだろ？」

「おおおおお――！！！」

「みんなの意見は決まったからな。・・・でいつするの？」

俺はもう後に引けないのが分かった。俺は、脱力して言った。

「・・・明日放課後・・屋上・・」

なんで俺、あんなこと言つたんだろう・・・・・俺は神のせいだという事にした。

第5話 自分からした約束を自分で破るのって以外に勇気が必要

『「どうしたヒート。やつれた顔をして』

「いや、どうしたもなにもお前が原因だろー。」

トイレの個室にこもって、独り言をする俺。今が放課後でよかつた。この時間帯なら誰もトイレに来るような事は無いし、安心できる場所だ。

「いいか？俺は健全な校高生活を送りたいだけなんだ。どうしていつも、邪魔をするんだ。」

『邪魔って、私の声がヒート以外に聞こえないのは説明していただろう。それを忘れて怒りに走ったのは誰だ？』

「そもそも、人の多い場所で話し掛けるなって、前から言つてるよな？お前こそ……痛ででえ！…分かったから、引っ張るんじゃねえ！」

「イツ、状況が不利になると別の意味で厄介だな……

「・・分かつた、落ち着こう。とにかくこのケンカの話は無かつた事にしよう。俺の負けつてことにすれば一番簡単だしな。一応春一さんに話してみる。」

『なるほど。最低限の知能はあるみたいだな。けどヒート……』

『「何だよ、もつたといぶつて。遠慮なく言えよ。」

『『校高』生活じゃなくて『高校』生活だ。漢字が逆だぞ。』

ただの会話でそこまで読み取らなくていいんだよ、別に……

「春一さん、いるかい？」

俺は春一さんのいる2-Cの教室の戸を開けた。放課後だから全く希望は無かつたが、奥の窓際の席に春一さんが絵を描いていた。夕日を背に、ノートに2Bの鉛筆を走らせる春一さんの姿に、少し

大人びた雰囲気が出ていた。

「春一さん。少し話しても大丈夫ですか？」

「・・・ん？ ああ、ヒデか。久しぶりだな！ まあ座れよ。」

春一さんは、自分の隣りの席から椅子を引いて強引に俺を座らせた。

「見ろよ。良い絵とは思わんか？」

そう言つて僕に見せた絵は、ポンと出でてくるメタモンが見事に巻かれたウチに変身したと思う絵（しかもかなり上手い）が出てきた。

「なんでそんなモン描いてるんすか？！ 間違いなく放課後描く必要も意味もないでしょ！」

「いやー、一応三十分かけた力作なんだが・・・」

「別ので頑張って下さい！」

「で、話があるとか言つてなかつたっけ？」

「・・・すっかり忘れてた。よし。聞いてみよう。

「・・春一さん。俺と春一さんがタイマンするつて話し聞きました？」

「ああ。今日はオレは知らないけどその話題で盛り上がつてた。」

「頼みがあります。そのタイマン俺の負けつて事にしてくれますか？」

「確かにこのケンカはお前から売つたと聞いたが？」

「確かにそうです。けど、辞退させてもらえますか？」

俺は頭を下げようとした瞬間だった。気がついたら、胸ぐらを捕まえられていた。

「・・・お前。なめてるのか？」

「・・・やばい。かなりまずい展開になつてきた。」

第5話 自分からした約束を自分で破るのって以外に勇気が必要（後書き）

「これがもう無沙汰です
よろしくです

第6話 話し合いでも友情は得られる

「お前はケンカ売った本人が逃げるのが、どれだけ最低か分かってるのか？」

春一さんは、何に対しても正直で、正々堂々する人間だった。そんな性格だったの忘れていた。

「…春一さん。俺だつてこんな事したくないんですよ。けど、俺はもうケンカしたくないんですよ。」

「うるせえよ！卑怯者が！」

春一さんが拳を振り上げた。俺は防御をしようと、殴ろうともしなかった。もともと、俺の嘘でこうなったのだから殴られてもしようがないと思っていた。だから、ただ歯を食いしばっていた。しかしいくら待つても拳が振つてくる事は無かつた。

「…ケンカはしたくない、って言つたよな？」
代わりに思いもよらぬ言葉が降りてきた。あまりにも急な事でこし驚いてしまった。

「は、はい。そうですけど。それが？」

「何か理由もあるのか？やるつて口にしたら必ず実行するお前が実行しないって、なにがあるんじやないのか？話してみなよ」「春一さんにはさつきまでの怒りの表情はなく、さつき会つたばかりの、柔らかい笑顔で話し掛けてきていた。

「ええ。実は…」

俺はそこで口を止めた。『好きな人がいるから』って言おうとしたが、普通にそう言うのがかなり恥ずかしくなってきた。ていうか、普通は言わないものだろ。俺は違う言葉を出した。

「実は俺、高校に入つたら、不良を辞めようと決めていたんです。

「なるほど。で？不良を辞めるにも、なにか理由があるだろう？」「ヤバイ！この人めちゃくちゃ鋭いんだつた。しかし、簡単にバレ

るはずが無い。その自信が俺にはあった。

「じゃあ当てるか。お前、多分好きな人でもいるんだろう?」

・・・・・・本当に人間なのか、春一さんは。俺は恥ずかし涙が出てきた。

「すいません。俺つてそんなに分かりやすいんですか?」

「いや、偶然だよ。オレもお前と同じ立場だからさ。」

同じ立場ねえ・・・ん?

「・・もしかして、春一さんも好きな人が?」

「いやあ・・・そなんだけだからオレも不良なんかやめて、好きな人間のために生きようつて思つたんだよ。無駄なケンカはしなかつたり、弱いものを助けたり、そんな人間になりたいんだ。」

春一さんは恥ずかしそうに顔を赤らめながら照れくさそうに話した。けどその話し方には強い決意が見えた。

「確かに。俺と同じですね。」

「・・・・・なんか、アレだな。中学校以来じゃね?こんなに喋つたのって」

言われてみればそうだ。中学校時代、同じ『不良』^{ヤンキ}という種類にいたが、こんなに明るく会話をしたのは、ひょっとしたら、初めてかもしねりない。

「恋する元ヤン同士、頑張ろうぜ。」

「・・・そっすね」

俺たちは夕日を背に、軽く拳を作つて軽くぶつけ合つた。俺たちは単なる『友達』から『同士』へと変わつた。

最終話 別れとは運命のよひなし、むつじよつもない理由が存在したりする（前書き）

なんだかんだで最終話です。

最終話 別れとは運命のよつな、むつじよつなない理由が存在したりする

『いやいや、世の中分からんものだな。』

「お前が言つな。」

あの事件が終わって数日、俺はクラスのちょっととした英雄と化していた。話し合いだけで上級生を倒したといつ、あるはずのない噂話まで出てきてやつかいなところだ。クラスの人間に無いウソをついてしまかすのも、結構、つらいものだ。

「元々お前が余計なことを言わなかつたら、春一さんとももめなかつたし、根本的に、こんな事も何も起きたのに・・・つたぐ」

『まあ、いいじゃないか。ちゃんとした友人もできたことだし、その上のこのクラスと仲良くなつたんだ。なんの損があるといつのだ？』

「・・・もういい・・・なんでもない・・・」

「イツはお母さんか？こうこう世話好きな奴が俺から見たら面倒なものなのに・・・

『残念だが、聽こえているぞ』

「分かつた！俺が悪かつたから髪を引っ張らないでくれー！」

・・・・・クラスが静まり返る・・・

「・・・いや・・・寝癖つて意外と治りにくいもんだな」

苦しそうる・・・さすがに無理だと思つたら、またみんなは、元の話題に戻つたようだつた。

「今のはちょっと危なかつた・・・かな？」

『ヒデト、今のは冴えていたぞ。』

お、珍しく褒められた。普段から褒められないから、こぞ褒められる地味に嬉しくなってきた。

「ま、俺もちょっとは成長したってことだろけどな。」

『だが勘違いするな。お前の「ゴールはソノジョヤない。アレだらう』

?』

「マイシに言われて、俺は思わずあおあおにやんの方へ目を向けた。

「・・・悪いけど、まだ「ゴールは速いと想つから自分のペースで

行くわ」

俺はそつ言ひつい、ゆつへりあおこ・・・やんの方へ歩を進めた。

最終話 別れとは運命のよつた、むつむつもない理由が存在したりする（後書き）

2作の連載に限界が見えたので、筆者の身勝手な都合によつて、この話で終了します。

苦情はあまり聞き入れません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1508e/>

困った時の力ミ頼み

2010年10月8日23時14分発行